

皇國人の始

館
函
架
號

大日本教育會館			
一	七	三	一
冊	號	架	函

十一冊

013986-000-1

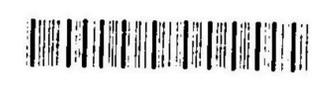
特56-892

皇國人の始

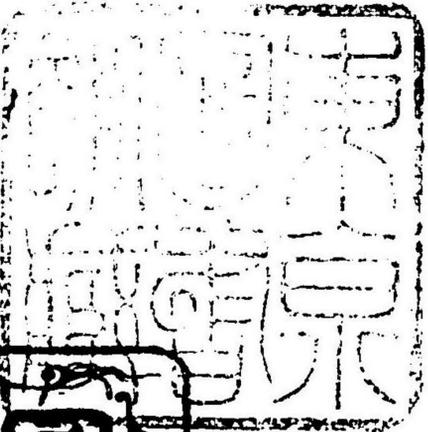
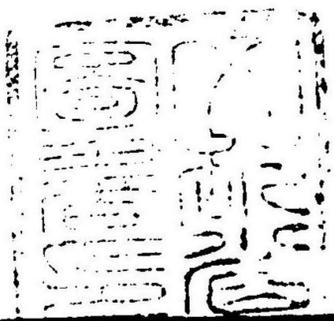
若林 長栄(徳三郎) / 著

M7

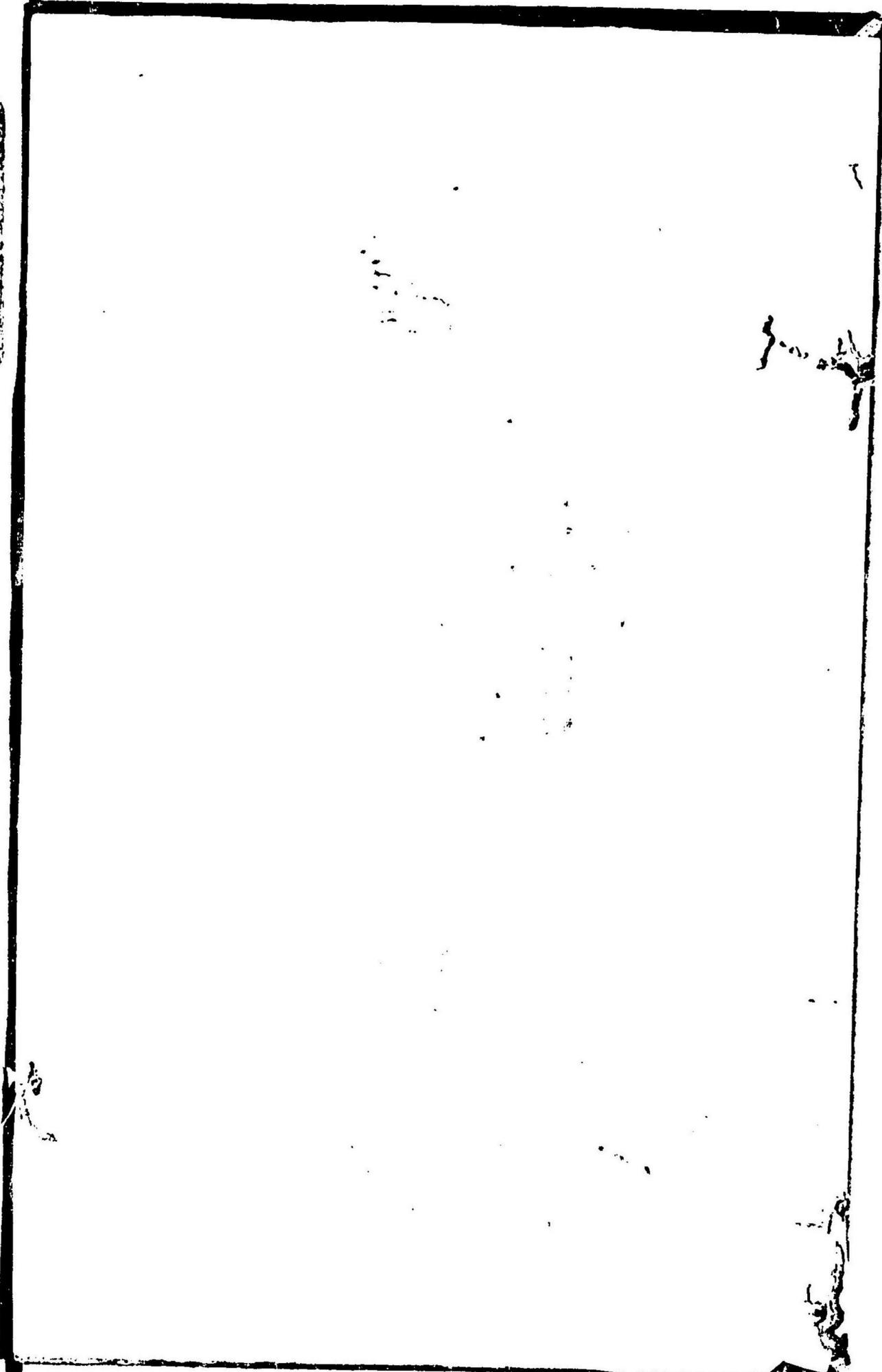
ABB-0235



特56
593



求
名





珠

易聖母題



附言

袖代卷口訣曰礮馭盧島自凝嶋也在淡路
西北隅小嶋也此說能く事迹より正
纂疏より在淡路洲之西南小嶋具今得此
名也あまのこゝろく西北の書謬誤なるは
又和州之宝山或ハ江州叡山なりと云説ハ
浮屠氏習合の書より出ず正義より
あまのこゝろ又八洲開闢以前の總号なりと云

云つ終ハ近世神儒合一者よま云出
まふ新義ハ一々只理屈ヲ渡リ事
迹を廢去且淡路の洲中亦礮馭盧島
葦原國と名はれりたる處ありと云ハ
是全後人好事者ハ所作なり也
旧事紀ハ礮馭盧島非所生也云ハ瓊
乃滴瀝ハ潮水の凝志まりたる處
ハ一々諾冊二神所依の神意なる
二神ハ産まふ大ハ洲也混成を
ハ

故ハ神代卷ハ礮馭盧島及ハ潮沫變なり
まふ對馬壹岐等ハ島ノ字を用ハ大
ハ洲ハ洲ハ字を填たまふ舍人親王の
ハを用いたまふ甚深の御事なり大和
山城淡路等の國中にあハ何モ礮馭盧
島各別ハ一嶋ハ名を用いたまふんや
ハ一々神代卷諸註解を讀リ
淡路日向出雲等神代の神迹ハ遍歷
ハ一々事迹を尋ね吟味したる人に

あしは只^{たゞ}疊の上乃了簡書物をあまの取
沙汰おとす地理を辨^{わきま}へ神世の遺迹
を拜謁したる人あり諺^{ことわざ}なり歌人の
居たあらし谷勝を知ると云へしやも實^{まこと}たる
其地其場よ到らばして物の感情^{かんじ}
あはれあつしに其境よ到りて直^{ただ}よ耳
目よ觸^ふきはあはれあつし心神よ徹^と蕩^{たう}
て言語よさふ處あつしあはれの妙所あり
實^{まこと}學^{まな}子の志あつし遍歴して神迹を

拜謁——古書を読む——冷^{ひや}煥^{くわん}自知^{しち}
の妙境必其場よ到りて言^{こと}を信
じし——別してあはれあつし神道に
志もの拜^{まが}せんとあはれあつし神
迹あつしと僕も拜謁の由来を皇國
人のけしんも類して兒女子よ讀し
るんを爲し聞くる處よく書記して
世よ弘^{ひろ}むる事なり形^{かたち}をぬ

皇國久遠始

輯著 若林長榮

古天地いづかみいまい割はきはふはををめめ々々渾ま沌んたんるる事こと鷄けい子こ
 ののああらら〜〜其その中ちゆうよよららままままはは神かみ聖せいをを國くに常とこ立たち尊たうととすす
 奉たてまつはは其その次つぎ五いつ代だいのの神かみもも皆みな高たか天あま原はらよりより天あま降くだりりしし
 沛み足あいいままごご土つちをを踏ふみみぬぬりりびび虚こ空う渺み茫まう茫まう中ちゆうにに住すままふふ
 其その後のち伊い弉さ諾だく伊い弉さ冉ぜんのの尊みこと天あま祖の勅さしづをを受うけけてて天あまのの
 浮う橋きのの上うへにに立たてて共ともにに計かららののぬぬくく底そこ下くだにに皇あ國くにななるる

らんやま 迺天瓊矛を以て指下てかきはぐまーか
あつゝ 滄溟を獲其矛の鋒より滴瀝の潮凝て一嶋
と生まり 是を名て 礮馭急嶋と云ふ 二神と云ふ
て 彼嶋より降みておのゝ海を國中の柱と云ふ
始く 溝合とて夫婦と云ふ 山河大地日月星の神
を産みひてより 天地位一 万物育つと云ふ
万億の世界の根本は 大日本國なり 又我邦の胎
の所は 礮馭急嶋なり 斯處は 淡路洲の西北の隅に在る
胞嶋と云ふなり 蓋神代卷曰く 礮馭急嶋為胞生淡路

洲といふは 本文よりして云やまきり 故に俗常と云ふ 胞
嶋と云ふは 又おのゝ海に在る 斯嶋の岩と云ふ
玉粒と云ふ 湧出する石幾千といふ 數を云ふに 其形
表は 金氣を以て包み 裏は 土砂を合む 漆と云ふ 輪
を以て 地盤を縮結する 形中心 金性主なり 事云 金
の 秘訣 顕然たり 是全く 瓊矛の 滴瀝を 散らし 其 體
凝結するなり 是も あり 其外 産鹽 釜 杵子 ちと といふ
世帯 及び 貝の 形皆 自然 石より 現る 嶋の 風系 樹木の
葉色 岩の 滑澤 亦 あり 是も 畫にも 書にも あり かし

かこししむたひい歩をえこぬ人誰か感歎せざらん
其地方は鶴嶋嶋あり二神交るをえむなりし
あふ迹を残せり其處は磐楳樟神社あり式文より
岩屋神社も出たり岩屋内は二神は蛭見と合
せあふ二尊始め蛭見を考へし磐楳樟船も載せ
て流しあふといふ事跡を跡せり其東南の方山
又天地大神宮の結社あり國常立尊伊弉諾を伊
弉册尊三柱まゝはまを其撰社は八万神達各神
像結社ありせあふ千早振神代の清漆いふ小社あり

たは清河のまきは仰ぐもち成條あり貫道幼あり
神代の遺風を崇え本を本と始を始とせり
神教も伊弉と別して天地本源の神迹諸神
化の靈觸を仰ぎ敬ひまよりて多くは神嶋も詣りて
まよりて報恩の拜礼をまらる事星霜を經たり又
靈験を蒙り奉る事所げてあふ一の中に
甲と世あ播州明石あり雨と清祈禱の折あり七月
四日神嶋も詣りて祈念ありまより一人り折言て
幣を以て瓊茅岩を動まよ忽抜出たり翌五日の朝



磯取盧嶋

大倭嶋



天地太神宮

古今集太上天皇

大堅の天より

あらず

玉子の道りか

よと

今の

まほ

海もや

子の満ちありそ

さみまことうらふおとこ

うまひし

磐楲樟神社

鶴嶋

名玉集

沼牙たき磯取まほ

ありまて神の

父母ま

うまひ

斯嶋の方より一片の雨を飛び来る其日降り雷雨
あきりけりて預主大彦谷村にふる通く潤り其お
海濱まで神急の方より向い津室修りせしり
勢湯の釜より飛入し時明星二つ末現しぬ万人
あまを拜し不思儀の奇瑞を感じ侍侍
あまを拜しは神を僕の家を神殿より移し御神神
しるすしなると朝暮のおれ急事なし今年又明
石より雨清のたえ七月十八日のお宇津室修事を修
し磯敷急崎より向い祈をせし嶋の頂上より龍燈二つ

現し明星末現しぬあま廿日ふ詣てまきり廿一日の
お宇津室修りの時忽ち降り翌曉よりふ因廿四日
よ再びは非婚より返りて報恩の神おをま侍りぬ
其神験影の形より志すがごとく一念欽仰をいしき
ともめらひ得益あま志すがごとく片時擁護をよつたふ
利生堂のしし誠し不測の外途よりは日ちかひ
も忠告満りの請り意して門人四人を供して八月
九日のお渡海し明より門人八人來りて神燈を
助け浦急のたえ磯敷急崎と天地大神宮との間

神のおといふ海濱して十一日の杵宇津室妙りを修
侍りしと忽浪風を巻くく砂を飛ぶ火
端を海波よ吹込神崎の頂上よ新麓かやま誌神
感格別して新神歎喜のよせおし荒人渴仰し
侍は其喜き又速法くかとし兼て予の宿願あり
こ用をせし事おまゝ其お世の刻をありふ徒を
一人を擇ひ竊に礮取魚嶋の絶頂よ攀攀せよ一字
の神祠を建てるよ加持しつた宝劔を納めて天神
七代の神靈をあり奉るよ又古昔神祠ありし

礎石を築り侍りしと一再興の志ありけり
よ今お祭を成就して松風の聲荒磯の浪よん
神を祀りし自己神の生去よゆり其父母を
しなほ其貴く辱き事かきらまふし三部の
郊の神を誦し神樂歌を奏して曰阿波
礼阿那面白阿那多乃志阿那佐夜氣於氣天御柱
國御柱無動國毛豊尔天地乃神乃誓乃礮馭
嶋阿南止布戸安奈止布戸や平の舞足の踏
をあらはに己よ奈雲のせらちかくおり侍りぬ

其前日門人乃い浦人十人をかり供して頂上可
登臨して磐石を産し松樹の枝を神代巻を載
て開闢の段を講し其のち明るる示して曰夫人
よく思へ家等開闢以來此國を生し彼洲よりはま
或い親とあり子とあり兄弟とあり親族とあり他人
ごまの貴となり賤となり此洲を故郷と思ひ彼を
を他國ともききども皆幻身流轉の逆旅して生涯
帝をけきば定まらば栖もなかり去るは此世のころ
雲とちり天地開闢の時かこり自己神靈降臨

乃本古よりて其父母を中奉は伊妹諾尊伊妹辨
尊よりつらせぬ天地同根万物一體の義此より
つら嗚呼世果の人をきり形といつども其父母は
御名を志望自己神降化の本古をとりまへし人
いをたぐむやたぐむ志望といつども遠國邊土を生
きたるは其ををきぬ事かこし我濟何の事なりて
此神國よ生まじ神道をきく事をゆる今又其
實の故郷よ帰省して其父母の御孫本を拜礼を
おこなふ事謙る希代の珍事なる事二尊に

嗚なららしし くおほきおほきしし人各ひとんをおつつてて孝かう養ようたたし
ままははるるししやや跡あといい感かん涙なみだよよむむせせんんでで解と得とぬぬいい醜みにく元もと
もも共ともしし袖そでををぬぬくくししてて信まことんん肝きまよよ裕あましし侍さむらいままぬ
二ふた三さん日にちのの浦うら祭まつり既すでよよおおりりぬぬききいいちちやや返かへ装まつらひをを借かし
侍さむらいままるる十五じふご日にちのの天あま地ち大おほ神かみ宮みや恒とこ例れいのの神かみ事ことおおて
二十にじふ余あまり丁ちやう西せいの方かた淡たんははくくししいいよよ八はち幡ばん宮みやおおりりままははひ
ああままままてて神かみ輿こし出い御ごああくくせせめめふふ僕わがもも幸さいよよ保たも留とど
てて供く奉ほうしししし弥や後ご神かみ事ことををははくく免めん神かみ魚いさなをを祭まつ
ささめめままままししよよかかししやや産う子ちこのの老らうああ群ぐんににあありりててるる

ぬぬままいいちちををよよりり祭まつららしし所ところのの先せん父ふ母ぼのの神かみのの供く奉ほうしし
手て不ふままるるににううけけががてて別べつ当とう坊ぼう及及び社しゃ人にん中ちゆうにに引ひかかひ
先せん十じふ四し日にちよよ、、渡わた御ごのの道みち筋すぢ神かみ夏なつののややううせせめめををままてて免めん
ししてておお十じふ五ご日にちのの巳み刻ときよりより御ご本ほん殿でんにに伺かへ候こう神かみ拜らい修しゆ行ぎやう
ししてて御ご動どう座ざ加か持ぢををははくく免めん警けい蹕ふりししてて供く奉ほうしし
ままははるる産う子ちこのの中ちゆうににあありり近きん國こく近きん在ざいりり系けい指さしのの老らう
ああ男おとこ女よめ群ぐんりり集あひひてて袖そでををははくく免めん踵かかとををははくく免めん予よのの人ひと
もも列れつをを引ひききしし神かみ輿こしのの後ごにに従したがひひ道みちままががしし神かみ樂がくをを奏そう
しし供く奉ほうのの人ひとにに三さん種しゆ太たい拔はくをを高たか声こゑにに唱なめめははくく八はち幡ばん宮みや

の拜殿に入御ましゆて清膳清酒酒の初香を
捧種々の神おまをりて後海濱に遷し奉りて
所おて祝詞奉幣して神樂を奏し次は神の角の
とて十二三の子供相撲をりて神官より双方は褒
美を賜せ次は子供藝者などいかに神意を
くおるまゝ人々覺へ其儀いそ人かこおし
りもて明心より里ハ予り神役をばせりて
傳へ別條の人二百余十余艘の船も奉りて拜
礼を奉り奉りて田舎の人々の心は正しくし
ていせ

のもく嘗て侍る物として神輿後御のやうを
まはし殊緒をばりてかきまゝし神輿を解人
前齋して火を改め由日よ各海潮に浴しぬき
子よ青襖侍烏帽子をきりて幣を楯系とがし
通より太鼓を唱ておはし後御をまはりて
あおもかくおせりてまはりてきりてたりて
又餘り既に入日の輝とともて御本宮に還幸
まはり別當職の許して内殿に伺候し神祓を
奉りて中央より國常立尊御長二尺餘左より伊特

諾尊右より伊弉册等各御神形たせぬふ
御神形たせぬふ仰くも思ひは御神
あり尤の方の御社より八十萬神の御神像數を
あつて或は座一或は立せぬふ貴き事かまらぬ
御神像一も御神をかく華に乃くは事おまじ
ありやいども近世神儒合一者流より各各を
形をかろり天神七代を以ておろり世に
神形を造る事近世より其多し其言は華に
顯し記し侍はるる名は實の實あり神名ありて

形なき神ありは人なり又形ありといへば凡夫の
肉身も亦しく思ふなり天上天下水火金石
無間中少も融通無碍の神形にておろりは
物一と道の至極おろり無色母形を説くは彼佛
の顯教も其如の理を法身とて見識も致るもの
あり神道も妙有なり神代卷の始より神聖
ありらむもぬふ其形華牙の如く譬言一物を以て
を載せし神道の主意形神なきものも各あり
付て扱へば一は能者あり神名あり一は即

形神ありゆき事を知る處一其無生始の神
 う天地を開闢日月の相をも現し一風も雨も雷も
 雲も陰陽五行七十二候も造化一あつと傳く神
 書の正見あり理の氣れと神神をいりて一て空理
 此をわらふ異教習合の見識あり嗚呼萬國
 根本の地ハ流路洲も亦よはふよかぎり天地大神
 の尊神ありゆ一八百萬神一と神係を證せ
 一なる事か一ま一も何とがま法事あり
 一やわらふ貴き神なる本流の神途ハ世人遍く

あつて中び神なるを尊ぶ人もあつても
 沙汰なき一本とあり一始を始めとせよと乃神
 教を信實よ慕ふ實學なきゆへ世よ弘まらぬ
 歩をもちぬ人稀もはるも思つていもくうらめし
 く神國よりと神教のおとらへりくありて悲
 むる事事のかぎりおらるとはめくも流路や
 あり一伏して教くハ僕神意の法意を蒙り有
 縁の人を度しと當社よ指むのころ時を拜謁させ
 神恩を報謝ありまらんといと神人ら返り念

して退下たいげなり侍りぬ諸しよ館かんはつまは門口かどぐちは大勢たいせい
 集あつまるゝ郷きやう會かい意いとして子供こどもの藝げいか多おほく車くるま引ひきあせて
 侍まじ侍まじりしはあまもあま父母ふぼの神かみの清きよ急いそよやあ何なにも
 はあても神かみ急いそのあまあてく情なさけをかこまりて供とも
 奉ほうの姿すがたを備そなへて見み物ものもまきかおもいとふ更さらはらり
 藝げいおろりて人もちりてくよ海うみのまりて四方しやうほうも静しずまり
 ありけき珠たまよ才さい秋あきの月つき光ひかり星ほし流ながる後あとりはあ
 空そらの名なをさしつるまはれおのころ後あとはらり好このむ瓊たま矛こ
 石いしはよなして各おの月つきや矛この備そなへたれり

あがして愛あいよそあをあかぬ
 一ひと夕ゆふ別べつ当たう坊ぼうの廣ひろ間まは儀ぎ建たてを設おけ神かみ代しろ巻まきのひも
 中なかつき諾だく冊さく二に神かみの神かみ徳とくを憑たも談だんき川がはは老おあ甲か女によ御ご
 仰おほして神かみ恩おんの廣ひろ大だいなる事ことを弁わべ報ほうしてはら
 かく記しし旨しめを誓ちかひあはれあま示ししていづくおま
 大だい千せん世せい界かいひる一ひと世せいいども洲しゆのははるをいひ
 淡たん路ろ洲しゆあり都みやこの國くにれ名なをさす初はつめ儀ぎ冊さく二に書しよ臨りん
 湯ゆ媾ご合あひして先まづ淡たん路ろ洲しゆを考かうえめい吾われ知してめい
 即すなは吾われ洲しゆと名なけたりよ新あらたの教けうは何なに事こともみは

子に死すを志す者一あり死を知りては其は一
 當りたるもなり慎むに志すは其の義なり内府謀
 乃其の金氣を以て志を志すあり天地の慎む
 あらはるる能くおのころ益をおいて金土の妙
 命を志す金一又徳いつく日法の訓うて金の性
 有けしきいちりゆるあり志すは吾志とおのふち
 金の道有り二神の志を象ふ大い洲の才一と吾志
 洲と名けぬ事志深の法なり有り君と一す
 を知りしきい君とたる臣と一志を志すなり

臣たるに親の死を思ふあり子と志す
 擇して志を教へ子に死を志すあり父を志すなり
 行い父母を有りし夫夫の死を知はるあり又篤實な
 して外をば世に婦人の死をおもふなり故に操正しく
 して内をおさめ内外おさまりて家齊い國治り
 天下平るはも君臣上下皆みはらうら吾死か
 一して一して一するも一あり人として死を知
 志すに上仁愛の心なり只收斂の臣を善とて
 ありきを志すと下を苦め匹夫匹婦のたるとあり

らも笑ふもみかへり王みは天地神祇のみもみ
 をくけて^{おん}齡も短く^{たにあや}國危く一士くして^{おん}死を志し
 まる忠義を^たつて^たれ武を^たげまらに農民^た死を^たら
 ちま^た耕^た一^た耘^たる^た事を^た急り^た職人^た死を^た知^たは^たま^た
 たくみ^た拙く^た商人^た死を^た思^たい^たま^たれ^たの^た産業^たをお^た給^たむ^たら^た
 して^た先祖^たの家^た村^たを^た失^たふ^た是^た皆^た其^た家^たよ^たま^たれ^た其^た業^た
 又^た疎^たき^たの^た君^たを^たい^たか^たし^たや^たお^たも^たい^たま^たれ^た由^たり^たお^たけ^たす^たや
 神^た職^た死^たを^た知^たら^た神^た書^たを^た守^たり^た神^た業^たを^た励^たむ^た一^た
 出家^た死^たを^たあ^たく^た戒^た律^たを^た守^たり^た法^た義^たを^た信^たじ^たと^た志^たし

醫^たう^たて^た死^たを^た知^たら^たは^たま^たの^た治^た法^たと^た時^たに^た死^たを^た可^たま^たる^た
 人を^た害^たす^た諸^た藝^た法^た能^たる^た死^たを^た思^たい^たま^たれ^た達^た人^たと^た知^たれ^た
 能^たく^たに^た死^たす^たよ^た後^た世^たの^た世^た榮^たを^た好^たむ^た者^たを^たや^たし^たて
 其^た死^たを^た死^たを^たお^たも^たい^た人^た亦^たき^たり^た由^たり^た一^た法^た道^たと^たも^た又^た藝^た
 たり^た中^た少^たも^た亦^たお^たら^た日^た神^たの^た所^た本^た國^た玉^た垣^た内^たの^た神^た域^た
 那^たま^たの^た神^たを^たさ^たか^たし^た藝^たを^たお^たも^たい^た死^たを^た思^たい^たま^たれ^た末^た次^た才^たよ^た神
 學^たお^たも^た短^たく^た只^た七^た天^た竺^たの^た教^たを^たお^たも^たい^たま^たら^たゆ^たく^た一^た金^た
 神^た祇^たよ^たは^たら^た其^た死^たを^たあ^たく^たに^た已^たを^た信^たじ^た人^たを^た導^たき^た
 ち^たげ^たま^たる^たもの^たを^たま^たり^た世人^た只^た外^た西^た北^た事^たの^たち^た

ちのてを去る性天竺魂よまじり暇前
 貴き神道なる事を去るに鄰の宝をかぎつて何
 事も傳言をたねを成はる吳の聖賢の貴て人
 皆神祇の子孫となりぬら其先祖の神威を輝
 さんやあふぬらぬく却て神祇を無ふし神を
 賤む其まよ生も其邦を非謗ハ即吾の恥辱なる
 事を去るに佛者のやもまきハ神を佛の奴の
 如く云ふ神を粟散邊州と云穢土なりや云言佛
 者天津日嗣を去る評して泰伯の子孫なるを

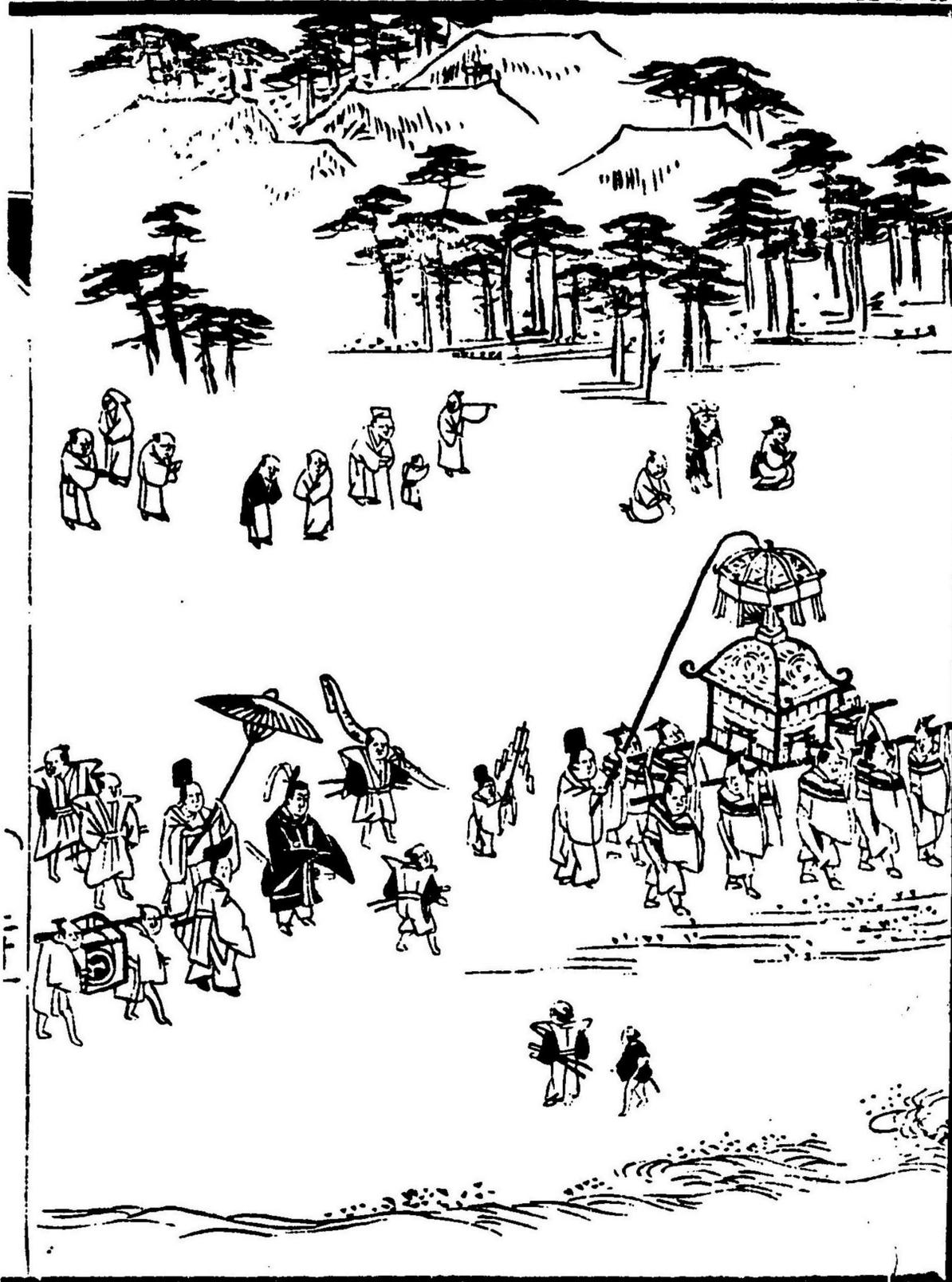
東夷ありと神を去るくして乃た去る國なるを
 曰よ非謗をいぬるを去るに書に記して人を去るに
 かくの如き學問何ぞ佛の聖意に叶らんや仲尼ハ
 魯の春秋を脩めて父母の邦を貴し周王を敬ひ
 名を正を先とて釋迦孔子我朝よ生まぬに神
 道を去る輝やかしむに先も角も吾知かしと
 信ふ國を貴し我が神祇を敬ひ我が大君を尊ぶ
 三禮を守らざる輩はたまた数万卷の書を暗記を
 ばくも實ハ人面獸心なるを去るに人多き人のや

此も人言あり人よもよも人よも人よも
 のん言ひありて諸冊二巻の國を言ふも
 一よありていかにての神言を言ふも
 古金の道を言ふも一係ありて神言の義あり
 神の祕の大元を述へる人々とも先國の
 終りありてこの神言の神の一言つ天津流河の
 秘咒文ありといふ人多し天を阿咩と云國を阿
 志波羅國と云中央を阿麻乃波羅と云上中下
 阿の音にて一切を言ふ人々の頭を阿多麻と云

下を阿志と云ん神のまゝを阿波羅と云ん是一
 上中下各阿を以て包たり天人唯一の神道を言
 へ一故曰天地万物一言以てあるを言ふといく阿の
 一音ありて天系といふもたかまアハアをア
 羅アと云言はる言を合ひて是を以て知はる一
 天地万物を羅萬像を合ひて言はるものなり
 事を又高天原は三部あり宗派を以てまハ大天
 地の頂上あり齋えを以てまハ天孫はしはるを
 禁中と云あり靈宗を以てまハ元神の終はる由

是より阿あ一切の母うも御事を起る處ところ一神の至
 るをあめの御中まゝあま怒おこ大神かみと申まを奉たごはも
 阿あの音を以もつて頭かしらと云い天地開闢あめつちひらくの時神聖かみの化生
 を阿あ一かいの如ごとくと譬たとへ又また諸冊二神あま浮う橋はしの下
 あ一と始はじめて言葉ことばを起おこめめ先まへあらうこと一
 ややと云いたそのめめ是こゝ相飲あひまじの盥う觴さうより又また日の始はじめを
 阿あ一と云いたあ一と云いたううきあげたのうさをうけ
 と云いた一の始はじめを起おこす御み世よの春はると云い成なりあうらううら
 さはううらううらううはあ人ひとといふも御み物ものの始はじめの称なづくこと御み子こ

と云いにととと娘むすめも阿あのむと云いふ子の生うまひはははは
 阿あの子と云い人ひと生うまひは阿あの時ときと云い死しまし時とき
 阿あと息いきを呼よぶ阿あより生うまる阿あようは事こと
 阿あ知しる事こと一言葉ことばの至いたて切きる阿あははは御みと云
 たうと云いたうと云いた阿あかあ一ああかあ阿あに
 之これ一阿あくもも一ろああははし阿あくもも阿あくもも阿あくもも
 奈な一ああらら阿あ一阿あくくはは阿あくくはは阿あくくはは阿あくくはは
 云いはらら阿あくくはは至いたて阿あああといふう阿あくくはは又
 阿あくく神かみささ阿あくく秘密ひみつ宗しゅう阿あ字じ本ほん不生ふじやうを説いふ



阿字觀を唱へて天の至極を阿迦尼吒天と稱し
地の至極を阿鼻地獄と云五方の佛土も東方を阿閼
佛國土と稱し南方を阿羅怛曇三婆嚩曇羅佛國
土と稱し西方を阿彌陀佛國土と云北方を阿目佉
悉闍惡佛國土とし中央は本より阿字法界體性
の大日ありあつても五方の佛土としどもたアハア
まアハアをア羅下の内は含義包羅せらるる事を
あはるし候阿字の音異國は終の音ありあ
いへば相通まはといへども吾國音はあつた

よき志あり候又請宗旨ともいふと唱へ奉りて
黃磔宗にて外國の音を用ひておみとるふなき
唱まともは音よてあつて佛といふ功德は遠
く候り候天竺の音は我々國に通じ候事多し
水を阿の音をまれば海人をあまふといふ類自
然の始合あり天竺の文字も音亦も皆梵天より傳り
たれり候高天原の神京より傳はる音は近き候
我國の事も符合まは事多き候あり候事
も亦も亦朝の高天原天祖の神孫天降りて供奉

の神もまたも血脈は相續の國もまたも世を同じく
て論ずるを以て其外の國もまたも世を同じく
天竺が其の喜声よ近しく其の喜声よ其の
は阿字を貴くしといふは義の上の事なりて我
の風の貴くも其の徳も亦く日用の言語も亦く
阿字を唱へて其の喜声よ先づ其の喜声よ其の
阿波日あをいふを其の始とする行住坐臥
須臾も大洋祝詞を唱へて其の喜声よ其の
板の神秘ありて其の傳授をうくる一人は其の

用ひて其の喜声よ其の徳も亦く日用の言語も亦く
貴き國の習せありて其の喜声よ其の喜声よ其の
洲と名けし其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の
秘訣を其の口傳へて其の喜声よ其の喜声よ其の
先づ其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の
終りて其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の
禮を以て其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の
を礼拜して其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の喜声よ其の

殿敷皇嶋の南より一峰あり碧巖我々を以て

山嶺松（山嶺）松（松）々たり大和嶋と名く人麿の歌よ

天（天）きかほじちのちぬ（ちぬ）漕（漕）く川（川）のたより大和嶋（大和嶋）の

ち海（海）のほふあり大日本豊秋津洲（大日本豊秋津洲）を登（登）るめつは

胞（胞）をふりゆ（ゆ）よ大胞嶋（大胞嶋）とも呼（呼）ぶる所の人よ同（同）ハ

昔（昔）より登（登）るありと云傳（云傳）ハ悲（悲）きと登（登）る人（人）をきよし

才（才）傳（傳）ふりゆ人（人）既（既）たハ清地（清地）よ登（登）るそ（そ）後（後）津（津）の

せをやと首（首）よ（よ）雷符（雷符）をかけ腰（腰）よ（よ）龍泉（龍泉）を佩（佩）す

く（く）先達（先達）まきハ人（人）各（各）家（家）おし（し）と危石（危石）を（を）せ（せ）く

薛蘿（薛蘿）を攀（攀）す（す）絶頂（絶頂）よ到（到）皇太山（皇太山）祇神（祇神）を（を）あ（あ）り奉（奉）ら（ら）ま（ま）ん

十六日（十六日）の所（所）く（く）糸（糸）緒（緒）ハ（ハ）涉（涉）脚（脚）の神（神）拜（拜）して

未（未）刺（刺）る（る）めり（めり）又（又）明石（明石）よ（よ）趣（趣）く（く）謀（謀）よ（よ）志（志）故郷（故郷）を（を）ま（ま）り

志（志）父母（父母）の清膝（清膝）下（下）を別（別）れ（れ）め（め）は（は）よ（よ）思（思）く（く）ハ（ハ）い（い）ふ（ふ）名

残（残）を（を）く（く）逢（逢）々（々）と（と）て（て）立（立）少（少）き（き）ハ（ハ）浦人（浦人）もの（もの）あ（あ）る（る）に

海（海）岸（岸）又（又）は（は）く（く）ひ（ひ）と別（別）れ（れ）惜（惜）ハ（ハ）又（又）い（い）ふ（ふ）か（か）り（り）ん

ほ（ほ）知（知）る（る）ハ（ハ）昔（昔）は（は）よ（よ）明石（明石）の（の）大（大）花（花）谷（谷）の（の）岩（岩）よ（よ）は（は）あ（あ）ハ（ハ）見（見）別（別）

子供（子供）等（等）ハ（ハ）見（見）は（は）あ（あ）て（て）かく（かく）と告（告）げ（げ）ま（ま）り（り）く（く）ま（ま）り（り）ハ（ハ）所（所）の

門人（門人）追（追）く（く）出（出）ま（ま）り（り）そ（そ）其（其）あ（あ）ハ（ハ）福（福）瓜（瓜）大明神（大明神）の（の）神

主（主）の（の）籠（籠）よ（よ）岩（岩）を（を）登（登）十七日（十七日）の（の）淡州（淡州）より（より）送（送）り（り）乃（乃）松

奉るに其おまから渡海して十八日の朝我が掬
 ちみかへつ王の徳を餐食し液を煉りて偏く報
 恩の神拜を形し奉らるぬ

皇國人生始終

諸國弘通書肆

東京	光啓社
東京	光風社
東京	公文社
同	北 昌茂兵衛
同	稻 田佐兵衛
同	小 林新兵衛
同	山 中市兵衛
同	牧 野吉兵衛
同	佐 久間嘉七
同	太 田金藏門
同	北 澤伊八
同	若 林半七

東京	出雲寺萬治郎
同	森 治兵衛
同	青 山清吉
同	京 都村上出店
同	鈴 木喜右衛門
同	江 島喜兵衛
同	大 阪屋藤助
同	東 生龜治郎
同	若 林喜兵衛
同	水 野慶治郎
同	長 野龜七
同	岡 田文助

弘通

西京

村上勤兵衛

薩州鹿兒嶋

書林會社

藤井孫兵衛

濃州大垣

岡安慶助

出雲寺文治郎

同岐阜

三浦源助

大谷仁兵衛

同高田

田中弥兵衛

勝村治右衛門

同

村上哲藏

永田調兵衛

同

篠田伊十郎

佐々木惣四郎

勢州津

山崎與兵衛

田中治兵衛

同山田

本屋傳四郎

島林專助

同桑名

千屋宗治郎

神光宗八

越前武生

千秋與八

福井源治郎

同福井

田邊左喜助

福井孝助

同敦賀

田邊知堂

辻本仁兵衛

同

佐々木慶助

同同同同同同同同同同同同同同

須學勤兵衛

加州金澤

鍛治安平

若林茂助

同

山田耕吉

石田忠兵衛

同

中村喜平

伊庭芳兵衛

同

近田太平

遠藤平左衛門

丹波福知山

中村茂三郎

梅村伊兵衛

同

岡田清兵衛

松井榮助

作州津山

横山治平

竹岡文祐

同

文華堂

藤井佐兵衛

播州姫路

灰屋輔二

辻本九兵衛

同

灰屋長平

若林喜助

同

小灰屋八

筑間半兵衛

同高砂

小灰屋八

神戶源左衛門

信州

葛原屋武兵衛

中西嘉助

備後尾道

上原屋文助

弘通

二

西京

伊東久兵衛

同 川島九右衛門

同 北村四郎兵衛

同 西村七兵衛

同 西村九郎右衛門

同 小林庄兵衛

尾州名古屋 小 林藤吉郎

同 栗田東平

同 失田藤兵衛

同 鬼頭平兵衛

同 秋田屋源助

同 美濃屋源助

同 永正兵衛

紀州若山

同 阪本屋喜一郎

同 阪本屋弥兵衛

同 本屋文助

同 帶屋伊兵衛

同 甲州府中 藤傳右衛門

三州岡崎 加藤利兵衛

江州彦根 小川九平

豐後府内 大阪屋正三郎

雲州松江 園山喜三右衛門

和州奈良 小 瀬弥三郎

同 高橋平藏

泉州堺 鈴木久三郎

同 北村佐兵衛

阪府下

周知會社

藤原為時

同 大木市兵衛

同 松村九兵衛

同 真部武助

同 澤田幸助

同 前田德太郎

同 梅村茂七

同 田中太右衛門

同 松本善助

同 小林定七

同 此村庄助

同 中川勘助

阪府下

同 岡田茂兵衛

同 豐浦幸兵衛

同 前川善兵衛

同 前川源七郎

同 九家善藏

同 三水木佐助

同 中島德兵衛

同 橋本德兵衛

同 柳原喜兵衛

同 森本太助

同 淺井吉兵衛

同 金尾為七

同 三木平七

同 梶田喜藏

弘通

同同同同同同同同同同同同同

阪府下

岡	倉	中	赤	石	鹿	花	吉	小	吉	梅	中	揚	三
鳴真	澤政	村弥	志忠	田和	田清	井卯	田善	谷卯	岡平	原龜	村庄	川孫	善助
七	七	七	七	七	七	助	藏	郎	助	七	衛	衛	助

同同同同同同同同同同同同同

阪府下

田	松	杏	田	小	近	中	中	三	山	畑	廣	小	書
中九	田正	田幸	原新	倉榮	江萬	川藤	野啓	木平	内八	中吉	瀬藤	川新	林商
兵衛	取	助	助	藏	助	郎	藏	衛	七	衛	助	助	社

明治七年第廿九月御免許
同七年第十月發允

輯者 若林 德三郎

大阪府下 墨香居 北尾 禹三郎

東大組第十九區心齋橋通安土町北江入

